

KIHS



NEWS LETTER

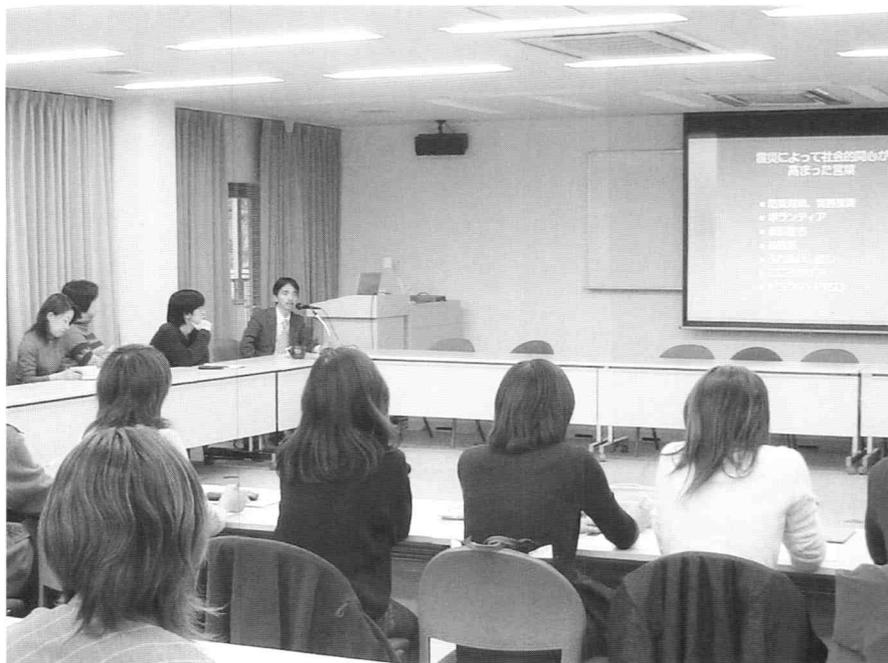
甲南大学人間科学研究所
Konan Institute of Human Sciences



2004
Vol. **03**

甲南大学人間科学研究所では、「現代人の心の危機」を総合的に研究するという理念のもと、研究会・研修会を重ねています。今夏、その成果をもとに、公開シンポジウムを行います。テーマは「トラウマ」です。ニュースレター第3号では、昨年度末に行った研究会の様態をレポートし、次回公開シンポジウムの講師陣の中から2名をご紹介します。

震災とこころのケア —8年間の実績と今後の展開—



講師：加藤寛(兵庫県こころのケアセンター／精神医学)

日時：2004年1月16日(金)

場所：18号館3階 演習室

1 995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で、被災者は生活の基盤を失っただけでなく、精神的にも深い傷を負いました。今回の研究会では、震災後の神戸で「こころのケアセンター」を組織し、被災者への心理的援助に取り組んでくれた加藤寛氏をお招きし、活動内容を紹介していただきました。また参加者とともに、災害時のこころのケアが抱える特有の難しさなどの問題点について討論を行いました。

「こころのケア」という言葉は、大震災以後ひろく用いられるようになり、今では一般的な理解を得ています。しかし阪神・淡路大震災当時には、こころのケアのシステムもマニュアルも日本にはありませんでした。また、精神医療への抵抗感や認識不足もあり、加藤氏らの活動は困難を極めたそうです。

災害時のこころのケアが難しいのには、次のような要因が考えられます。災害時には、特殊な心理状態に陥りやすいので、異常な状況を異常と感じられなくなること。地域によって求められるケアの質が異なること。また被災地で生活する治療者や救援者自身も、被災者のひとりであるということ。したがってその場その場でどのようなケアが要請されているのかを有効に調査し、その要請に対応できるよう他の機関と連携することが重要となってきます。さらに災害復興の過程では、長期化にともない治療者や救援ボランティアの人々、学校の先生など、支援者の方が疲弊してくるため、支援者自身を、

それぞれの立場に応じて支援することの重要性が確認されました。

災害時のこころのケア活動では、普段は診察室や面接室にいる専門家が自ら被災地に向向いて被災者に声を掛けることになります。ただしそれは、下手をすればカウンセリングの「押し売り」になりかねない危うさを孕んだ活動です。そこで加藤氏らは、専門性を表に出し過ぎないように細心の注意を払いました。まずは保健師の傍にいて少しずつ被災者と馴染みになり、必要なときにのみ、専門的技量を提供するという手法をとりました。しかし、精神科医や臨床心理士としての専門性を十全に発揮できない活動は、「なぜ、自分が今、この仕事を行わなければならないのか?」というジレンマをもたらします。それが昂じると、専門家としてのアイデンティティを保持することも難しくなってきます。「こころのケア」というと、ケアが必要な人ばかりに焦点が当てられがちですが、ケアを提供する側をケアすることも欠かすことのできない活動の一環であることが確認されました。

これらの阪神・淡路大震災の経験から、心的外傷後ストレス障害(PTSD)やトラウマ(心的外傷)などの研究や人材養成を行う全国初の拠点施設として「兵庫県こころのケアセンター」が今年4月1日に開設されました。加藤氏らが手探りの活動から得た貴重な知見は、次の活動に向けて磨かれ、継承されていきます。

「靖国」と「歴史」のトラウマ



講師：高橋哲哉（東京大学／哲学）

日時：2004年3月26日（金）

場所：18号館3階 演習室

今

回の研究会では高橋哲哉氏を招いて、日清戦争に遡る靖国の歴史を繙きながら、犠牲の論理の仕組みと、現実に関連している問題について、多数の資料とともに講じていただきました。2004年4月7日、小泉首相の靖国参拝が違憲であると判断する福岡地裁の画期的な判決が出ましたが、首相は「わからない」として態度を変えようとしていません。靖国参拝をめぐる一般的な議論は、それが過去の戦争責任を否認すること、そして憲法違反となることに集中しがちです。しかし高橋氏が危機感をもって論じるのは、「国家は尊い犠牲の上に成り立つ」として戦争を下支えする靖国の論理とシステムそのものです。首相をはじめ為政者たちの最近の発言に「尊い犠牲」や「追悼」といった言葉が頻出していると高橋氏が指摘するとおり、この犠牲の論理とシステムが戦後50年の潜伏期間を経て、再び顕在化しはじめています。有事法制、自衛隊の海外派遣、教育基本法改正など、右傾化しつつある日本社会において、我々はいかに靖国の論理とシステムを捉え、抵抗できるのでしょうか。

国家のために殉じる人間を産出するには、死に対する恐怖心や遺族の哀しみの感情を「国家の物語」によって処理し、逆に幸福感へとすり替えることが必要です。日本では、戦死すれば「英霊」「忠霊」として靖国神社に祀られ崇められるという「国家の物語」が作られ、システム化されていきました。

このように靖国の論理によって生み出されたトラウマは、現在も癒

されないままであるばかりでなく、さらに別の傷が加えられています。先の戦争体験がトラウマとなり今も苦しんでいる人々、あるいは家族が英霊として靖国神社に合祀されていることに苦痛を感じる遺族がおり、かねてより政府を相手取って訴訟を起こしてきました。彼らのなかには、首相の靖国参拝によって再軍事化への不安が引き起こされたり、戦時中の体験のフラッシュバックが起こったりして、PTSDと診断されるような精神障害を被っている人々もいます。いっぽう靖国の論理を支えにせねば生きられない遺族が、訴訟によって新たに心の傷を負わされているという事実も存在します。たとえば平成14年、小泉首相靖国参拝違憲訴訟に対して大阪地方裁判所に陳述書が提出され、ここでは靖国に反対する声を聞くだけで激しい苦痛を味わうことが訴えられています。つまりこの遺族らもまた靖国の被害者であり、彼らを一方的に国粹主義者として否定しては、犠牲の論理の巧妙な性格を見誤ってしまいます。

靖国の論理とシステムは、このように立場の異なる者それぞれに幾重もの暴力を加え続け、そしてさらに新たな被害者を生み出すようにしているのです。これに抵抗するためには、現実に関連している個々のトラウマに向き合い、正当な喪の作業—つまり正当に哀しみ、国家に対して怒り、その責任を問うこと—を進めねばなりません。はたして、この喪の作業がいかんして可能となるのかは、今後探っていくかねばならない問題です。



※これまでの活動

2004年1月～3月

研究会

第7回 震災とこころのケア —8年間の実績と今後の展開—

日 時 : 2004年1月16日(金)
講 師 : 加藤 寛(兵庫県こころのケアセンター)

第8回 〈狼男Wolf Man〉をめぐる人々

日 時 : 2004年1月30日(金)
講 師 : 福本 修(恵泉女学園大学)
パネリスト : 森 茂起(甲南大学)、港道 隆(同)

第9回 歴史のなかのトラウマと解離

日 時 : 2004年2月27日(金)
講 師 : 白川 美也子(国立療養所天竜病院)

第10回 「靖国」と「歴史」のトラウマ

日 時 : 2004年3月26日(金)
講 師 : 高橋 哲哉(東京大学)

※これからの活動

2004年7月～

公開シンポジウム

第5回 トラウマ概念の再吟味 —埋葬と亡霊—

日 時 : 2004年7月25日(日)午後1時～5時30分
場 所 : 甲南大学甲友会館
共 催 : 兵庫県こころのケアセンター
パネリスト : 加藤 寛(兵庫県こころのケアセンター/精神医学)
白川 美也子(国立療養所天竜病院/精神医学)
高橋 哲哉(東京大学/哲学)
森 茂起(甲南大学/臨床心理学)
指定討論者 : 中井 久夫(兵庫県こころのケアセンター/精神医学)
港道 隆(甲南大学/哲学)
司 会 : 横山 博(甲南大学/精神医学・臨床心理学)

第6回 感性の変容(仮題) 2005年夏開催予定



【編集後記】

新緑の美しい季節となりました。KHISニュースレター第3号をお届けします。
人間科学研究所のある甲南大学18号館は、六甲の山並みを背にして建っています。六甲の若々しく柔らかい緑が目にと優しく、心を和ませてくれるのですが、眺めているうちにそれがなんだか「おいしそう」な色に見えるのは私だけでしょうか。この緑が濃くなっていくにつれ、次第に暑い季節、そして第5回の公開シンポジウムがやってきます。